

中国・内モンゴルの経済および観光業の現状

フ ト ン ラ ガ*

1 はじめに

内モンゴル自治区は1945年に成立し中国の北部に位置している。面積は118.3万平方km、全国で第3位を占めている。総人口は2367万人で44個の民族がおり、モンゴル族の人口は382万3000人である。

近年、内モンゴルの観光業は人々の所得増加や余暇の拡大、迅速な経済発展の背景下で増大している。内モンゴルの一般的な経済発展のスピードよりもはるかに上回っている。2007年の観光客統計データからみると、内モンゴルの国内観光客数は2908万1700人、海外の観光客数は149万4500人で、2009年の国内観光客数は3880万1800人、海外の観光客は128万9600人である。

内モンゴルの観光資源には森林、砂漠、草原、民族文化、歴史遺産などの多様な資源がある。その中、もっとも魅力的なのは草原生態資源とモンゴル族を主とした民族文化資源である。内モンゴルにとって観光産業は雇用の増大、地域の活性化にもつながり、経済や社会発展の重要な役割を果たしている。しかし、中国国内の観光業が発達した他の省と比べると、観光客数や観光から得た収入、また知名度や競争力上、内モンゴルはまだ大きく遅れている。

本論文では中国内モンゴルの歴史概況、経済と観光業の発展背景、現状を整理しまとめた。また観光資源や観光市場の現状を分析し明らかにした。最後に、内モンゴル観光業に存在する問題点を5つの面に分けて提議したのである。

2 内モンゴルの経済および観光産業

2-1 内モンゴルの歴史概観

内モンゴル自治区は50万年前から20万年前ごろの原人の化石が見つかっている。紀元前4700年から紀元前2900年にかけては紅山文化が燕山山脈の北方に栄え、紀元前20世紀ごろにはオルドス人が住みつきはじめ、春秋戦国時代には趙・燕と匈奴との間で抗争が繰り返された。1206年に建国した大モンゴル国、(後に大モンゴル帝国)のチンギス・ハーンの弟ハサル(ハサル)の領地、

*国際人間学研究科国際関係学専攻 博士後期課程

中世にはその子孫が支配する。モンゴル人が作った元が滅び、帰還したモンゴル人が、西部のオイラトモンゴル（現在のカザフスタンや中央アジア）、ハルハモンゴル（現在のモンゴル国）、内モンゴルに大きく3つに分けられ、互いに権力争いを続ける。そうした中、1646年満州の女真人が内モンゴルと手を結び、明を倒し、清の時代が始まる。1688年モンゴル西部オイラトモンゴルが作ったジュンガル王国のガルダン王が対ハルハ戦争を行い成功したが、ハルハモンゴルの貴族が逃げ、1691年に清の支配を認める。ガルダン王がハルハ戦時中に甥のツェウエーン・ラウダンに王位を奪われ、後ろからの援助が止まった。

1694年、事実上、最後の統一したモンゴルの王様ガルダンが現在のモンゴルの中心部（現在のウランバートル市のあたり）清とハルハモンゴル、内モンゴル軍と死ぬか生きるかの戦いに出たが、圧倒的に強い連合軍に破り、大敗した。その後、半世紀にわたり、1755年ハルハモンゴルと内モンゴルの手を借りた清がジュンガル王国を倒し大虐殺を行った。1755年モンゴルが独立を失った。200年あまりたった末、1911年、中国では辛亥革命後中華民国が成立するとともに、モンゴルが独立を宣言し、内モンゴルも合併を申し出たのである。1913年モンゴル軍が内モンゴル解放戦をはじめ、ほぼ全域から中華民国軍を追放した。しかし、帝政ロシアの陰謀で、この戦争は失敗に終わってしまった。1915年モンゴルの国境にあるキャフトで露・蒙・中3国の協定で、内モンゴルと外モンゴルを自治区とした。内モンゴルでは、中国に進出していた日本の関東軍の援助で、清朝皇帝溥儀によって建国された満州国とチャハル部出身の徳王によって1939年張家口にモンゴル連合自治政府が成立した。1945年8月のソビエト軍の侵攻により満州国とモンゴル連合自治政府は崩壊し、大勢の日本人開拓団が命を落とした。8月14日には葛根朝事件が起きた。中国共産党の影響下でモンゴル聯合自治政府（1941年モンゴル聯合自治政府が改称、戦後解散）に対し抵抗運動を指揮したモンゴル族のウランフ（烏蘭夫）が、1947年に内モンゴル自治区の成立を宣言し、内モンゴル自治区人民政府が成立した。これが現在の内モンゴル自治区の起源で、中華人民共和国の自治区としては最も早い成立である。徳王は内モンゴルを追われ、モンゴルへ逃亡したがそののちに逮捕されたのである。つまり外モンゴルは独立の道を歩んだが、内モンゴルは中国共産党の影響があったとはいえ、同じモンゴル族同志の運動と対立の結果自治区となった。（地）

現在内モンゴル自治区に行政区は9市3盟に区分され、101個の旗県がある。地理的には中国北部に位置し、総面積は118万3000平方kmで、日本の面積の約3倍に相当する。面積では新疆ウイグル自治区、チベット自治区に次いで3番目に大きい。北東から南西へ伸びる細長い形で、東端から西端までの距離は約2500km、南北の直線距離は約1700kmに達する。東部、南部、西部は黒竜江省、吉林省、遼寧省、河北省、山西省、陝西省、寧夏回族自治区と甘粛省の8省・区と隣接し、北京、天津に近接している。北部はロシアとモンゴルとの国境に接し、国境線の長さは4221kmである。内モンゴル自治区は中央アジアのモンゴル高原周辺地域に位置し、全域の高度は比較的高く、平均海拔高度は約1000メートルである。そのうち、全区の高原、山地の占める面積は約70%である。草原面積は全国1位、森林被覆率は60%以上であり、牧業と林業が



地 内モンゴル地図

出所：(<http://www.baidu.com/>)

全国の上位を占めている。また鉱産資源も非常に豊富であり、ニオブ、希土、氷州石、メノウの埋蔵量は全国2位である。2001年のはじめに、中国最大規模の推定埋蔵量を誇るスリガ天然ガスが内モンゴル自治区の南部で発見された（約7000億t）。この発見は、中国中西部開発におけるエネルギー供給に大きく貢献していると考えられる。内モンゴル自治区は気候の寒暖の差が激しいため、雪災害、洪水や干ばつなどの自然災害に見舞われるケースが少なくない。2000年から内モンゴル自治区は「休耕による造林プロジェクト」を実施しはじめ、地域内約110万haの耕地、70万haの草原を保護し、生態系環境の改善に努めてきた。

内モンゴル自治区の総人口は2405万600人で（2009年）、49個の少数民族がおり、人口526万1300人、その中、中国国内の約8割（429万8900人）のモンゴル族が居住し、独特の民族風俗があふれている。豊かな自然の風景にも恵まれているため、毎年モンゴルパオや内モンゴル大草原を訪れる観光客によって、自治区は20億元以上の収入をもたらされている。それでも、中国国内の観光業が発達した他の省と比べると、観光客数や観光から得た収入、また知名度や競争力上、内モンゴルはまだ大きく遅れている。現在、内モンゴルは観光業を急激に発展させ、大量の観光消費を促進し、観光業を新たな経済発展の手段にしたいという目標で、世界有数の観光目的地になるように目指している。中心都市として呼和浩特（フフホト）、包头（ポウトウ）、烏海（ウウハイ）、赤峰（セキホウ）が挙げられる。自治区首府の呼和浩特市は人口200万人を超える中型都市であり、自治区の文化、経済、政治の中心である。

2-2 内モンゴルの経済発展と主要産業の特徴

新中国成立 1949 年の時、内モンゴルの農牧業は 74.6% を占め、典型的な伝統農牧業の地域だった。60 年間の発展建設や経済構造の変化で 1978 年に 3 次産業の比例はそれぞれ 32.7 : 45.4 : 21.9 になり、経済構造は大きな変化を表した。2008 年になって 3 次産業の割合はもう一方変化があり、それぞれ 11.7 : 55 : 33.3 になったのである。内モンゴル自治区経済発展は特に改革開放以降不断で加速した。21 世紀に入ってから経済社会発展はもっと大きな変化をもたらしたのである。内モンゴル自治区統計局によると、1949 年から 1978 年まで内モンゴル地域の生産総値は 7 億 8000 万元から 58 億 4000 元まで伸びた。28 年間で 8 倍に上り、それ以降 2008 年（2008 年の総生産値は 7761 億 8000 万元）までの 30 年間で約 134 倍に上ったのである。中国の各省区内で 16 位になり、全国後位から中位に移った。2008 年の経済総量は 1949 年の 233 倍で、新中国成立以来内モンゴル地域経済は年平均 9.7% 増長し、改革開放以来年平均 12.1% 増長した。2002 年以来連続 7 年間の増長は全国第 1 位になり、自治区の中で経済発展が一番早くて、都市と農村の面目の変化が一番大きい。一人当たり GDP は 1949 年では 118 元、1978 年では 317 元、2000 年では 6000 元を超え、2003 年では 1 万元を超え、2006 年では 2 万元を超え、2008 年では 3 万元を超え（32214 元）その年の為替レートで計算すると 4638 ドルである。2007 年に内モンゴル自治区の経済総合競争力は全国で 10 位に入り、西部各省区内では第 1 位になった。

内モンゴル自治区の西部は、大砂漠が広がっているため、農牧業のほとんどは中部平原に集中している。「第 9 次 5 ヶ年計画（1999 年から 2000 年まで）」が実施されて以来、牧畜業が著しく発展してきた。2001 年で家畜、食肉、ミルク、綿毛などの総合生産力は全国五大牧畜区のトップに位置した。一人当たりの耕地面積が全国 31 省の中で 1 位を占め、全国平均水準の 3 倍である。主要穀物は小麦、米、トウモロコシ、コーリャンなどが挙げられ、工業原料物は大豆、麻類、煙草、甜菜などがあり、甜菜の生産量は全国 2 位を占めている。

内モンゴル自治区の工業部門は、改革開放以前には石炭、鉄鋼、機械工業が中心であった。これらの産業はその後も基幹産業として順調に伸びてきた。一方、改革開放以降政府は前述した 3 つの産業のほかに食品加工、医薬、電子といった軽工業の発展にも力を入れた。その結果、近年は草原の環境特性を活かす産業の発展が目立っている。食品、山菜、果実酒、乳製品などの健康食品は全国各地において好評を博し、輸出国も 20 数カ国に上っている。包頭市皮毛会社の「東宝」革製品をはじめ、羊皮、牛皮製品も全国規模で売り上げを伸ばしている。

2008 年の生産総値中第 1、第 2、第 3 次産業の比率は 11.7 : 55.0 : 33.3 である。2008 年の主要農畜産品や工業産品の産量を量った統計を見れば内モンゴル自治区の主要産業の特徴を理解することができる。（図表 2・3）

図表2 主要農畜産品の産量と家畜の飼養数 2008年

産品名称	計量単位	2008年	比去年増長率%
食糧	万噸	2130.23	17.6
その中：小麦	万噸	154.00	-12.5
とうもろこし	万噸	1410.70	21.5
稲谷	万噸	70.50	-13.4
大豆	万噸	106.09	23.8
薯類	万噸	194.61	26.4
油料	万噸	117.54	48.0
甜菜	万噸	170.04	43.4
果物	万噸	238.16	15.4
蔬菜	万噸	1360.84	6.5
肉類総産量	万噸	219.37	6.3
豚牛羊肉産量	万噸	192.60	6.0
豚肉	万噸	64.70	7.3
牛肉	万噸	43.10	6.1
羊肉	万噸	84.80	4.9
卵	万噸	45.50	9.1
牛乳	万噸	912.2	0.3
綿羊毛	万噸	9.64	0.7
山羊毛	噸	6890	3.0
牧業の年度家畜保存欄	万頭(隻)	10677.2	-1.6
大家畜	万頭	1063.8	3.0
羊	万隻	8442.9	-3.8
豚	万口	1170.5	12.5

図表 3 内モンゴルの主要工業製品の産量 2008 年

産品名称	計量単位	2008 年	比去年増長率 %
精製食用植物油	万噸	34.00	- 4.6
完成品糖	万噸	22.37	16.9
乳製品	万噸	355.94	- 3.0
液体乳	万噸	325.71	- 5.7
原塩	万噸	236.81	- 5.3
巻タバコ	億支	222.50	3.5
紗	万噸	1.68	- 63.2
布	万米	5536.93	- 62.6
お酒	万升	24294.6	15.8
ビール	万升	98283.8	17.1
携帯電話	万部	17.59	- 87.7
テレビ	万部	866.75	4.4
石炭	万噸	47211.58	30.2
天然原油	万噸	174.94	4.5
ガソリン	万噸	41.97	- 7.2
重油	万噸	42.66	- 20.6
天然気	億立方米	100.21	27.7
発電量	億キロワット時間	2114.66	11.5
鑄鉄	万噸	1256.55	0.1
鋼鉄	万噸	1211.03	18.6
鋼材	万噸	1047.34	16.2
鉄合金	万噸	303.70	- 0.2
10 種有色の金属	万噸	166.86	25.8
セメント	万噸	3424.06	23.4
平板ガラス	万重量箱	1458.32	4.9
化学肥料	万噸	89.05	6.8
汽車	台	25245	58.9

出所：内モンゴル自治区 2008 年国民経済と社会発展の統計公報より

2-3 内モンゴルの経済および社会発展の現状

2009年、内モンゴルの経済は国際金融危機の影響にも当たったが、政府の指導や科学的発展観を重視して学び、様々な経済発展対策を採ったおかげで経済総体形勢は復活し、人々の生活は不断で改善、社会の各項事業は全面的に進歩することができたのである。

2009年、内モンゴルの生産総値は9725億78000万元で、2008年と比べると16.9%増長した。その中、第1次産業の増加値は929億2000万元で2.3%増長、第2次産業の増加値は101億39000万元で21.4%増長、第3次産業の増加値は3695億37000元で15%増長した。第1次、第2次、第3次産業の経済増長に対する貢献率はそれぞれ1.3%、62.2%、36.5%である。内モンゴル全区の生産総値中第1次、第2次、第3次産業の比例は2008年の10.7:51.5:37.8から9.6:52.4:38になった。1970年ごろは内モンゴルの経済や社会発展に第1次産業の貢献率が明らかに高かったが1978年になって比例が近づき、それ以降第2次、第3次産業の貢献率がだんだん高くなってきた。

内モンゴル自治区はこの60年間の発展を経て農牧業の基礎地位は強固され、工業化は本質的に進展した。特に、第3次産業の発展は迅速で、2009年内モンゴルの第3次産業の総量は全国第17位、増速は全国で2位を示している。

3 内モンゴル観光業の概観

3-1 内モンゴル観光業の背景と現状

内モンゴル観光業は1978年の改革開放を経て動きだし、観光業に対する認識が高かった地域の一つである。1978年から観光事業局や観光局を建設したが観光業はまだ民族地域で全面的に発展してない、観光市場の規模が小さいなどの原因で観光業の攻勢効果を発揮できず一定の脆弱性を表現した。特に、1989年の中国政治問題がちょうど起步した民族地域観光業に大きな打撃を与え、市場割り前は20%以上低下した。

1992年、鄧小平「南巡講話」以降、中国の改革開放が一步慎重になり、民族地域の観光業発展が積極的に取られるようになった。1997年のアジア金融危機が民族地域観光業にも影響を与えたが他の職種と比べると危険性が非常に低かったのである。そのため、1998年中国中央経済工作会议が行われ、観光業は国民経済が発展できる新たな手段であり、国民経済中の重要さを強調した。また1999年で国务院総理朱蓉基は中央民族工作会议で「民族地域は充分に優勢を発揮し、観光業と第3産業を大力で発展させ」と強調したため、内モンゴルは1999年から観光業を新興の産業と指摘し、新たな経済増長の発展として預かれた。

2000年の中国西部大開発戦略は民族地域の観光業発展に大きな機会を生じた。また2001年中国のWTO加入は民族地域の観光業が良い発展と挑戦の機会であった。以上の歩みを経て内モンゴル観光業の産業規模は快速で拡大し発展した。2002年、内モンゴル観光業は突破的な進展を得て、国内外観光人数ははじめて1000万人を超え(1196万9400人)、観光業総収入は82億

2000 万元だった。これはこの年の内モンゴル自治区生産総値の 4.75% を占め、巨大な発展潜在力と前景を表した。2003 年、内モンゴル観光業は SARS の影響を受けたが大きな災害が出てない。海外からの観光客数は 41 万 3600 人（2002 年と比べると 5.89% 低下）、観光外貨収支は 1 億 38000 ドル（7.38% 低下）、国内観光者数は 1294 万人で観光収入は 83 億 29000 万元（18.98% 増長）、観光業の総収入は 94 億 74000 万元（2002 年と比べると 15.25% 増長）でこの年の GDP の 4.53% を占め、損失減少は最低限となり海外観光者数の降下は全国で最小である。2003 年まで内モンゴル地域の星付レストランは 152 家、旅行社は 220 家、（この中、中国国内社 191 家、国際社 29 家）、A 級観光景観地は 58 家（この中、4A 級 7 家、3A 級 12 家、2A 級と 1A 級合わせて 39 家）、観光業に直接働く人は 6 万 7000 人、間接働く人は 33 万人である。内モンゴル観光業は以上のよう、前後自発性発展階段（1990 年以前）、観光産業の規模拡張階段（1991 年—1999 年）、観光業の快速発展階段（2000 年—2003 年）などを経験したのである。

2004 年、中国国内経済の持続増長や内モンゴル経済の快速増長の推進、また観光市場需要の変化で内モンゴル観光業は新たな突破をした。2003 年と比べると、入境観光者数と国内観光者数はそれぞれ 93.4% と 52% 増えた。観光の外貨収入と国内観光の収入はそれぞれ 82.9% と 49% 増えた。内モンゴル観光業は加速発展段階に入った。2005 年、内モンゴル観光局は海外や国内での宣伝活動を促進し、五つの大型観光交易会に参加した。その中、国際型の宣伝は 3 次（広州国際観光交易会、マレーシア、シンガポール国際観光展に参加した）、国内は 2 次（桂林、香港）で内モンゴルの観光資源を有力に宣伝し、また知名度を拡大したのである。この年の入境観光者数は 100 万 1600 人、観光から得た外貨収入は 3 億 52000 万ドルで、国内観光者数は 2061 万人、観光収入は 179 億 72000 元である。観光業から得た総収入は 208 億 9000 万元、これは内モンゴル自治区の生産総値（GDP）の 5.45% を占めている。

2008 年と 2009 年はチベット、四川（シセン）、甘粛（カンシュク）、新疆（シンキョウ）などの地域にデモが発生したことで、これらの地域に観光客が殆どゼロに近づいたが内モンゴル自治区は比較的に政治、経済が安定しているため大きな影響を受けてない。

3-2 内モンゴルの観光業発展戦略および目標

現在、内モンゴル自治区は観光業を急激に発展させ、大量の観光消費を促進し、観光業を新たな経済発展手段にしたいという目標で、世界中に知名度が高い観光目的地になるように目指している。内モンゴルの特色をアピールするため観光業界で使われるトレード・マークを作ったり、アジアで最大のスキー場を建てたり、北京や天津、煙台までの高速道路を施設したり、壮大な観光企業の育成や他の区域との提携、宣伝活動（広州国際観光展示会、中国国内の観光交易会、国際民間芸術会などに参与している）を強化したりする戦略や対策を採ったりしている。2020 年までに観光総収入を 4586 億元に達する目標である。観光総収入の増長速度は 20.8% と予測している。その中、国内観光収入は 3653 億元で、増長速度は 20% の目標である。国内の観光客は 13000 万人で増長速度は 10% の予測である。また、海外からの観光収入は 112 億ドルで、増長速

度は25%の目標である。海外からの観光客は1000万人で増長速度は15%の予測をしている。しかし、2009年の観光客統計データからみると、内モンゴルの国内観光客数は3880万1800人で、観光収入は573億22000万元である。2020年の予測である観光客13000万人と観光収入3653億元まで目標を達成するにはそれぞれ3倍と6倍ぐらい増やせなければならない。2009年の海外観光客数は128万9600人、外貨収入は5億58000万ドルであるから目標達成まではそれぞれ8倍と19倍増やせる必要がある。この比較から内モンゴルは観光業をもっと発展させ、国内や海外からの観光客を一層誘致する必要があると考えられる。

4 内モンゴルの観光開発の資源および観光市場

4-1 内モンゴル観光開発の資源分析

観光資源は内モンゴルの優勢な資源の一つである。内モンゴルには紅山文化、蒙元文化、遼文化などの歴史的な文化とモンゴル族が代表した北方少数民族の様々な民俗文化、草原、砂漠、温泉、森林など北国の自然風光や夏季の涼しい気候、冬季に形成する氷雪資源がある。また、現代経済発展から育成された観光都市や不断で発展している国境地帯などが内モンゴル観光業の発展する優勢な資源である。これらが内モンゴルの観光開発に良好な基礎になっている。内モンゴルの観光資源が以下のように特徴をもっている。

第1に、内モンゴルの観光資源が多様性と独特性をもっている。内モンゴルの観光資源が豊富で、国家の標準測定である「観光資源分類、調査と評価」によれば、内モンゴル観光資源は8つの主な分類を全部備えており、34個の第2の種類中30種を持ち、181個の基本類型中112種をもっている。全国観光資源である第2類や基本類型のそれぞれ88.2%と61.9%を占めている。また、内モンゴルの気候観光資源の条件は比較的に良い、空気が清らかで自然、工業汚染がないため夏季は避暑休暇、娯楽、草原でのスポーツ、太陽浴びや森林浴びを享受できる。総体的にみると、内モンゴルの観光資源の種類は多様で、景観、生物、文化の多様性や民族の独特性を現している。地域分布からみると、各類の観光資源は全地域に幅広く分布している。特に、呼和浩特（フフホト）、鄂爾多斯（オルドス）、呼倫貝爾（フリンボイル）、錫林浩特（シリンホト）、赤峰（セキホウ）などの主な観光地域に分布し主体景観資源の個性が目立っている。そして自然は民族文化の人文遺産、民俗文化などと緊密に結合し相互融合、相互に際立って観光景観地の開発と建設、また多目標の観光開発にとっても有利な条件を提供している。

第2に、生態観光資源は豊富で自然の雰囲気が濃厚である。内モンゴル地域は温帯気候帯、特殊な地理位置と地勢の変化で温帯、温帯半湿潤、寒温帯湿潤、温帯半乾燥と乾燥など多様な大陸性気候が生じ、草原、森林、砂漠、湖沼などの多様な生態系統が形成したのである。例えば、錫林郭勒（シリンゴル）国家級草原自然保護区、赤峰大黒山天然潤葉林自然保護区、賽汗烏拉（サイハンウラ）自然保護地などは各類生態系統保護地でありながら最重要な生態観光資源地でもある。今まで、内モンゴルには自然保護地が184所ある（その中国家級18所、自治区級50所）。

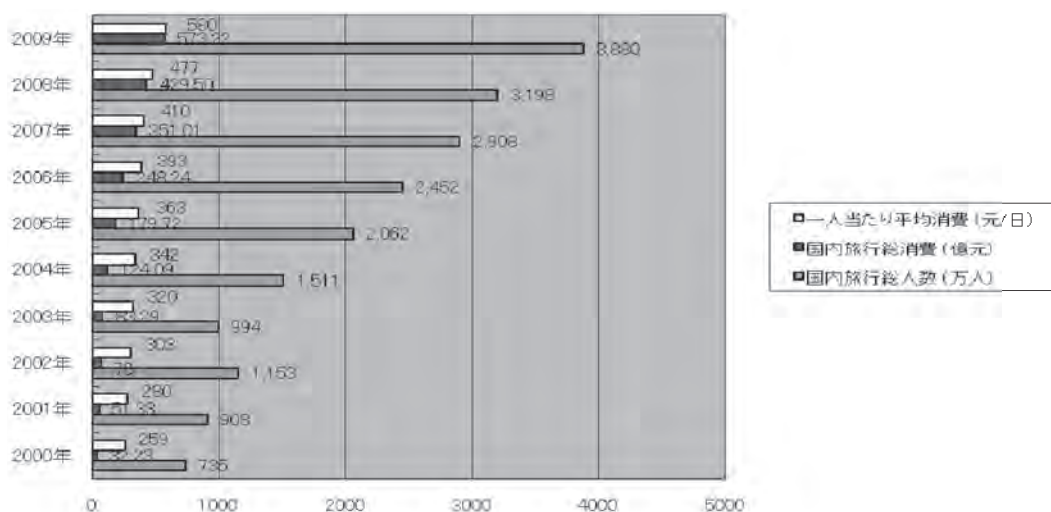
これらの原生自然景観と民俗文化は、生態観光、探検観光と休暇中の観光に良好な資源基礎を提供している。

第3に、観光資源は一定の区域範囲内良好な条件をもっている。自然資源の組み合わせからみると、森林、草原、砂漠ゴビおよび過度な類型から構成した大地地域（内モンゴルの東部、西部）の自然景観の環境差異と砂漠、草原、湖、河流、温泉、森林、山地景観は小さい地域範囲内の多元化組み合わせは、観光市場に対してとても強い吸引力がある。そのうえ、内モンゴルは豊富多彩な観光生産物の開発と観光活動にチャンスを与えた。自然資源と人文資源の組み合わせで見れば、内モンゴル草原、森林、砂漠、湖、流れなどが多様である自然景観、それぞれの特色のモンゴル族、鄂倫春（オリンシュン）、鄂温克（オウンケ）、達斡爾（ダカンエ）などの少数民族文化は地域上の組み合わせにあって、大きな程度上自然観光の景観単一性と同質性の観光生産物多様の開発を制約した。これで別の地域で開発した観光生産物は鮮明な特色を保持できる。

第4に、内モンゴル観光資源は中国東部の発達した地区の市場と相補性をもっている。内モンゴル観光資源とその周辺の省、地方は中国東部地区ととても強い相補性をもっている。内モンゴル自治区の原生自然の草原、砂漠、森林、氷雪などの自然景観資源とモンゴル族が代表とする北方少数民族の文化資源とその小さい空間範囲内の組み合わせは周辺省、地方、東部各省で全部備えていないものである。同時に現代の観光は多様化しており、内モンゴルが擁する森林、大砂漠、草原、民族文化、歴史遺産などの特典はちょうど観光客が求めている方向に合致する。これによって、内モンゴルの資源と中国東部の発達した地区の市場は役割分担を2重互補にもっている。

4-2 国内観光市場の現状分析

国内市場規模はだんだん拡大して、増長速度が速い。内モンゴルの国内観光客の総数が全国平均水準の速度で増長し、1999年から2004年までの年平均成長率は18.4%として、全国の15%の平均成長率よりも高い。内モンゴルの国内観光者数を全国国内観光者数の比重でみれば、同様にずっと上昇の形成である。1999年は(650万人)0.9%を占めていたが2004年は(1511万人)1.63%を占めている。2005年から2009年までも国内観光客は年々増えている（図表4）。近年、内モンゴルは観光業をもっと発展させるためにインフラ設備、観光資源開発、観光活動の誘致などを行っている。現在、内モンゴルには重要な観光項目は4つある。呼倫貝爾(フリンボイル)—興安盟(シンアンモウ)草原、森林、氷雪生態観光線路、錫林浩特—克旗—喀喇沁草原、地質奇観観光線路、呼和浩特—包頭—烏蘭察布—鄂爾多斯民族歴史文化観光線路、阿拉善(アラサン)大漠、居延訪古と航天科技観光線路がある。また観光業の発展につれて観光会社や観光飯店、ショッピング店も増加している。内モンゴル自治区の首都である呼和浩特市(フフホト)で現在国際旅行会社は17ヶ所、国内旅行会社は126ヶ所ぐらいある。星付の観光飯店は38所ぐらいあり、その中5つ星付は2ヶ所、4つ星付は6ヶ所、3つ星付は13ヶ所、2つ星付は13ヶ所ある。国内交通網は主として飛行機、汽車、バスなどがある。空港は7ヶ所あり、自治区内線と区外線が多く結んでいる。汽車の便数が以前より増えたため車内サービスや衛生も良くなっている。これは内モンゴ



図表4 内モンゴルの国内観光の状況 2002年～2008年

出所：内モンゴル自治区統計局より作成

ル国内観光の形勢が優秀で、内モンゴルの豊富な観光資源は近い将来もっと大勢の観光者を吸引する潜在力をもっていることを表明していると考ええる。

4-3 海外観光市場の現状分析

市場規模はだんだん拡大し、海外観光客の増加速度は明らかに速くなっている。近年、内モンゴルの海外観光客の接待規模は快速で増加の形成を表している。2001年～2004年まで内モンゴルの海外観光客の年平均増長速度は26%、これは同期国内観光客の19%の平均増長速度より高いのである。2004年、内モンゴルの海外観光客数は約80万人で、観光外貨の獲得は2億53000万ドル、海外観光客人数は全国で15位前後を並べる。2005年、海外からの観光客数ははじめて100万人を超えた（2005年の観光客数は100万1635人）。2007年は149万4500人、2009年は128万9600人である。このデータから内モンゴルの観光業が2005年から著しく発展しているが観光客数がまだ不安定であることが分かる。海外観光客周辺国家と地域は主体市場である。絶対数からみると、内モンゴルの海外観光客接待で第1位を占めるのが外国人、第2位は台湾同胞で、第3位は香港・マカオ在住の中国人で、最後は華僑である（図表5）。

観光客の国から分析すると、内モンゴルの外国観光客は主にモンゴル、ロシア、日本、アメリカ、韓国、シンガポール、イギリス、オーストラリアなどだ。現在までの統計からみると、第1位を占めるのはモンゴルとロシア市場で、内モンゴルのすべての海外観光客市場の92%を占めている。これは主に満州里と二連港で接待した国境周辺の観光客である。第2位は日本市場である。日本は中国の伝統的な第1位観光客の国で、内モンゴルの海外観光市場にも大きな影響を与

図表 5 内モンゴルの海外観光者の接待状況 1997 年～2008 年

国名	1997 年	1998 年	1999 年	2002 年	2003 年	2005 年	2006 年	2007 年	2008 年
モンゴル	226831	236967	231715	256079	241809	444270	577154	734341	787029
ロシア	91057	104192	109461	134732	146521	484033	536890	608720	615780
日本	14721	15226	16349	17036	5965	19808	29218	44070	36473
フィリピン	217	219	47	125	316	573	310	1355	1352
シンガポール	960	928	575	781	483	2994	3338	3440	2211
アメリカ	1439	1481	1603	3313	2381	5187	10492	9905	10171
カナダ	277	337	263	729	745	3393	3920	4152	3942
英国	596	444	934	1441	1036	3882	4910	5940	5557
ドイツ	1078	711	779	1107	848	8881	7453	7440	8162
フランス	607	517	501	511	728	911	1530	3293	4148
イタリア	598	423	362	749	356	2340	3267	1844	2363
スイス	85	85	93	210	248	179	1069	840	991
オランダ	110	94	195	121	119	279	88	325	226
オーストラリア	283	272	338	1143	909	2448	3117	4642	4938
ニュージーランド	14	18	21	363	244	317	430	390	409

出所：内モンゴル自治区統計局より作成

えている（図表 6）。第 3 位はアメリカ、カナダ、韓国観光客の市場で、これらの 3 ヶ国も内モンゴルの海外観光客市場にとって大きな発展潜在力をもっている。

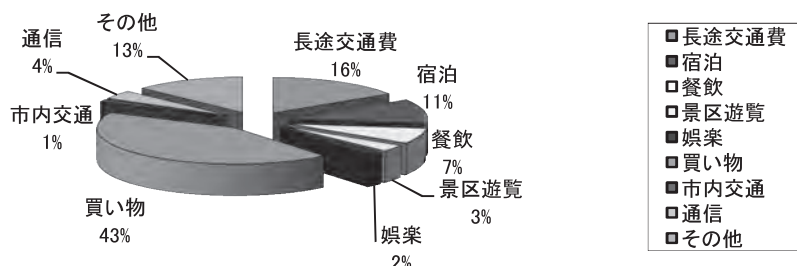
2007 年度の中国観光業の統計報告書からみると、内モンゴルへの海外観光客総数は 147 万 4349 人で、海外からの観光客数がトップである広東省のその年の観光客総数は 628 万 5131 人、内モンゴルの海外観光客数の約 4.2 倍である。

内モンゴルの海外観光から得た外貨収入の構成を分析すると、2002 年から 2008 年までは買い物や長途交通の支出比率は比較的に高い。特に、国境周辺の買い物消費の比率は 38.6% を占め、これは同期の全国水準よりも高い。全国の海外観光者の平均消費構成中、内モンゴルは長途交通と買い物消費支出の比率は前列を占めているが宿泊、飲食、娯楽、遊覧などの方面での比率は相対的に低いのである。これは内モンゴルの観光業が景観地の建設、飯店、宿泊、飲食などの方面でもっと開発すべきであることを証明していると考ええる。この方面に中国政府や観光局、内モンゴル自治区政府や観光局が力を入れて開発すれば、消費者の観光消費支出を宿泊、飲食、娯楽などの面で増やすことができる。このことによって、内モンゴルの観光外貨収入が増加すると考える。（図表 7）

図表6 日本人観光客の中国地域別に入境した数 1998～2007年

	1998年	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年
北京	435,156	456,451	543,319	468,904	564,546	292,256	475,038	450,020	505,730	587,842
天津	72,303	33,127	42,533	39,093	195,436	212,580	173,670	85,755	90,189	115,682
河北	39,298	48,521	48,613	5,217	64,430	46,583	89,308	84,874	86,049	89,396
山西	39,854	48,127	48,337	13,041	52,547	22,025	48,778	15,669	71,144	91,770
内モンゴル	15,420	16,349	18,733	11,218	17,036	5,965	40,940	19,708	29,218	44,070
遼寧	125,247	156,272	216,875	177,869	320,136	241,119	486,880	429,841	503,850	607,812
吉林	14,574	13,187	19,474	14,476	24,906	23,201	40,356	45,113	52,958	62,976
黒竜江	21,833	27,943	33,501	17,738	38,914	31,461	105,945	40,859	44,963	51,405
上海	508,921	498,935	537,565	548,633	822,625	722,604	1,218,810	1,089,672	1,138,546	1,152,606
江蘇	248,347	258,877	286,445	269,849	388,668	436,403	597,611	623,088	828,797	884,314
浙江	125,124	130,693	62,972	118,318	262,991	223,162	411,210	422,076	529,227	655,625
安徽	29,515	38,918	47,198	31,029	54,194	36,327	64,258	47,040	67,087	91,846
福建	51,611	83,652	50,530	34,104	126,717	114,150	179,828	163,198	175,633	197,846
江西	10,195	12,050	12,282	9,185	10,484	8,482	17,182	23,945	25,268	34,128
山東	97,928	114,081	32,619	111,928	225,779	161,161	292,149	278,170	343,681	401,345
河南	31,778	39,453	45,401	31,672	60,142	27,712	45,790	71,236	61,960	67,343
湖北	63,075	48,621	58,121	24,603	109,964	58,324	117,944	63,336	93,265	95,473
湖南	31,123	24,024	246,745	11,277	30,121	9,196	12,643	24,454	35,797	52,783
広東	276,857	341,243	295,840	403,655	671,640	476,589	1,031,685	962,727	1,077,452	1,280,254
広西	60,222	78,775	87,202	80,424	109,544	75,087	122,799	90,789	115,922	119,700
海南	31,704	23,489	25,139	19,540	28,029	16,095	18,284	27,635	38,291	39,503
重慶	39,181	36,536	45,827	32,658	67,831	36,152	95,391	59,642	94,660	79,924
四川	29,548	37,413	47,733	66,889	152,843	64,678	145,622	154,985	231,164	287,578
貴州	13,055	13,055	12,437	6,356	12,548	5,068	11,334	14,734	18,356	24,229
雲南	57,996	137,340	26,104	76,435	137,423	68,313	77,733	85,448	108,503	147,439
チベット	10,956	13,257	17,137	3,641	20,023	4,959	13,156	5,334	13,373	78,651
陝西	143,154	182,040	194,909	5,458	190,729	70,231	156,194	102,811	113,679	125,918
甘肅	33,368	43,911	52,827	34,473	50,196	13,765	33,912	39,804	38,891	41,067
青海	3,433	2,550	3,778	4,379	4,844	1,668	1,670	1,665	6,461	16,338
寧夏	1,714	2,079	1,896	1,835	1,716	875	1,734	2,106	2,121	1,637
新疆	33,540	46,751	51,947	42,406	35,098	16,309	68,215	44,083	33,775	25,449

出所：中国観光局旅行統計データより作成



図表7 内モンゴルの海外観光外貨収入の構成 2008年

出所：内モンゴル自治区統計局より作成

5 まとめ

内モンゴルの観光業は中国国内の観光業が発達した他の省と比べると、観光客数や観光から得た収入、また知名度や競争力上、内モンゴルはまだ大きく遅れている。そのため内モンゴルの観光業発展に存在する問題を5つの面に分けて提議したい。

第1に、観光製品の開発整体水準が低いことである。文化の内包の掘り出しが不足しており、観光精品の項目が少ない。観光製品の開発を総体からみると、草原風景にめぐるものや民族文化開発の観光製品が低いランクで繰り返し開発されていることが深刻である。草原、砂漠、湖などの観光製品の開発は民族文化を体现する主題である。しかし、開発中にモンゴル族を代表する民族文化内包の掘り出しが不足し、各観光景観地の民俗文化の表現形式は単一で低い水準は繰り返している。全面的にモンゴル族の日常生活内容の現われが欠如している。民俗文化の方式は規格化し過ぎて参与性が低い。

第2に、企業規模が小さい、観光経営は単一である。また大きな企業が欠如している。近年、内モンゴル自治区の観光企業は観光業の快速な発展につれて迅速に成長している。今までは一部の産品が市場需求に適切して形成できたのである。経営利益が良い観光景観地、観光レストランや旅行社、例えば成吉思汗（チンギスカン）陵旅行会社、响沙湾（シャンサワン）砂漠生態旅行会社、内モンゴル飯店、内モンゴル中国国際旅行会社などがある。しかし、総体的にみると規模が小さい、経營業務が単一で、全区の観光業の発展を動かせる大きな企業が形成してない。

第3に、観光景観地の空間分布が分散している。内モンゴル地域は広い上に観光休暇期と最盛期が明らかである。また観光資源の空間分布がまとまっていないため観光資源開発の景観地間の距離が大きくて集中程度が低い。観光消費の面から考えると、観光者は観光目的地への道で時間がかかり過ぎていることが多い。時間や交通費を多くかかるため観光線路の組み合わせが不利である。また、自然環境や気候条件の制約で内モンゴルの大部分地区は観光する時間が短い。このことによって大部分自然観光資源開発の観光産品は夏季に購買や消費されている。一方、他の季節に適する観光産品は深刻に不足している。この影響でも最盛期に観光者が大勢集まり、観光交

通やホテル、観光景観地などの接待施設が緊張しサービス質量も影響されてしまう。観光閑散期は、多くの観光施設が使わずに置かれ、観光企業の経営や発展に影響を与えている。

第4に、観光サービスの組み合わせ施設が比較的に低いのである。観光交通と観光産品は総合性の特徴を持ち、飲食、宿泊、娯楽、行動、買い物、観光、教などが含む。現在、内モンゴルの各地で観光施設の総合組み合わせ程度が低い、その中で特に交通問題は明らかである。特に、主要観光景観地への道路条件は良くない、開発中の観光景観地への進入はもっと厳しくて観光開発を制約している。また、観光最盛期の時に宿泊問題は厳かである。

第5に、観光資源と環境保護形勢は依然として厳しい。内モンゴルの生態環境、特に草原、湖（砂湖も含む）の自然生態環境は非常に脆弱である。だから、不合理な開発や必要な保護を誤ったら観光業の持続可能な発展の基礎資源を失うだけでなく、人と自然との共存までが影響されると思う。内モンゴル観光業の発展はこれらの問題を解決する必要性があると考ええる。

参考文献

- 高山陽子（2007）『民族の幻影 中国民族観光の行方』東北大学出版会、仙台市
- 金湛（2005）「中国内モンゴル自治区における経済成長と失業問題の産業的要因に関する考察」地域学研究
- 孫鋼（2001）「西部地区旅行業発展と対外開放」中国西部論壇報告書
- 国際観光開発研究センター（1997）「中国の主要観光地と観光資源および今後期待される観光地の紹介」国際観光開発研究センター P 54
- 奥山茂彦 元玉栄（1998）「誰も書かなかった内モンゴル；内モンゴル大草原縦走 2000 キロの旅、中国少数民族について」国際交流協会 P 264
- 松村嘉久（2000）「祖国中国をいかに見せるのか—観光スペクタクル、中華民族主義—」中国研究月報
- 水谷令子（2006）「中国内モンゴル自治区の生活環境調査」鈴鹿国際大学

内蒙古統計局 <http://www.nmgtj.gov.cn>

内蒙古旅遊網 <http://www.fuhbic.com/mongol/kankou.htm>

内蒙古自治区地図 <http://china.alaworld.com/modules.php>